

4/28・29 開催 ダンス・パフォーマンス【蘇る白鳥】 盛況のうちに終了！

1. バレエ版『瀕死の白鳥』（1907年初演）

【原振付】ミハイル・フォーキン 【出演】若林絵美(28日) 奥野亜衣(29日)

——『瀕死の白鳥』The Dying Swan(英)Le Cygne(仏)Umirayushchy lebed(露 原題)

1幕のソロ・バレエ。振付フォーキン、音楽サン＝サーンス。20世紀初頭の名バレリーナ、アンナ・パヴロワの代名詞的作品。今回は、1924年にフォーキン自身が出版した『瀕死の白鳥』舞踊譜にもとづき、写真や楽譜から成るその「舞踊譜」を、バレリーナ自身が読み解き、復元上演を試みました。



2. コンテンポラリーダンス版『瀕死の白鳥』（世界初演）

【振付・出演】関 典子

—— 命尽きる間際に、ひと声だけ美しい声で鳴くという「白鳥の歌」伝説。それは一般に、死への恐怖、別離の叫びであると認識されているが、哲学者ソクラテスによれば、肉体から解放され、新たなる未来を予見した、悦びに満ちた歌であるという。この世に「生まれ落ち」てから「命を落とす」瞬間まで、我々の人生は落下の連続の中にある。空と水、そのあわいを漂う白鳥の姿に、我が身を重ね、舞う。



3. H・アール・カオス版『瀕死の白鳥』(2010年初演)

【振付】大島早紀子 【出演】白河直子

—— 死とは、価値と意味を根こそぎ奪い取り、解体し、切り刻む究極の暴力だろう。この曲は、死に抗えない運命の過酷さに向かい合いながら、最後の瞬間まで尽きることの無い、生への強い意志と尊厳を感じさせてくれる。現代という、文明が加速度的に進む時代にあって、私たちの身体は、自らが分泌し続けてきた余剰物(すなわち文化)の中で窒息し、溺れかけている様に見える。身体経験が断片化されたことから生じた、緩んだ同一性の意識と希薄化している身体感覚を抱えながら、生の恍惚とその儚さは、存在という痛み貫かれていく。

(H・アール・カオス主宰 演出・振付家 大島早紀子)



*** 開催概要 ***

【日時】 2015年4月28日(火) 13:30/16:00 開演 29日(水・祝) 12:30/15:00 開演

【会場】 兵庫県立芸術文化センター 1階エントランス 特設ステージ

地元はもとより遠方からも多数のお客様にご来場いただきました。誠にありがとうございました。



(写真撮影：小椋善文 松本豪 山下一夫)